

---

# **気ままに！ ウェイストランド放浪記**

気分屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気ままに！ ウエイストランド放浪記

### 【著者名】

氣分屋

N5896T

### 【あらすじ】

気がつけばゲームの世界にいた！

そんな非日常的な事態に直面してしまった梶間かじま 勇ゆう。

果たして勇は、法も秩序もないこの『ウエイストランド』で生き

抜くことができるのか。

フォールアウト3の二次創作です。

初投稿作品ですので宜しくお願いします。

## 第1話　IとJの始まり（前書き）

初投稿です。宜しくお願いします。

## 第1話　Jリの始まり

2011年2月、とある県とある市とある住宅の一室にて1人の青年がテレビゲームをしている。

これがオレこと梶間勇かじま ゆうである。

え？ それだけかつて？

髪は短めで黒、中肉中背16歳のただのゲーム好きだ。

「おし、ニーク武器ゲット～。」

今やっているのは『フォールアウト3』というゲームで、核戦争後の荒廃したアメリカを旅するといつ超自由型RPGである。

「むう、さすがに徹夜でやつてるとキツイな…。」

時刻は午前4時になるとJリ。窓から見える空はまだくっきり朝といえる薄暗さだった。

広大なマップを歩いては発見した建物等を探索するため、ついついぶつ通しでやってしまうんだ。

こまめにセーブして後でやればいいじゃんとか思つてるかもしけんが、一旦足を踏み入れると隅々まで見たくなるじゃん？ ならない？ あ、そう…。

「はあ、Jリ口クなもん残つてないなあ。」

今いる場所はどこかのオフィスビルか何かだったようだ。

あちこちにクリップボードや本（焼け焦げてたりして価値は殆どない）が散乱している。

「使えるのといえばステイムパックやRAD系くらいか。 しけてんな？」

愚痴りながらもプレイしてると、ふと外からサイレンが鳴つているのに気がついた。

「また救急車か、最近多いよなあ。」

最近奇妙な事件が多発している。ゲームをしていると突然意識を失い昏睡状態に陥るというものだ。  
原因がまだ解明されていないので、ゲーム禁止令みたいなのは出されていない。

まあオレは出されても自重せんがなwww

「ん？ あれ？」

「画面が動かなくなつた。このゲームはデータ量が膨大だからときたまフリーズすることがある。

「うわあ、またやり直しかよ…。」

オーバーズーンとしていると画面にふと違和感を覚えた。

「……ん?」

画面は荒廃した荒野でフリーズしている。見馴れた背景の箒なのに何故か目が離せない。見ていると吸い込まれそうな感覚に陥った。

その時既にオレの意識はそこにはなかった。

## 第2話 非日常は唐突に

「ここは、何処だ…。

何故、ここにいる…。

こんな知らない場所に1人で。

いや、オレはここを知っている。

そう、知っている。

・・・・・

ついさっきまで見ていたのだから。

「……んで……」

余りの事態に動搖して言葉がうまく出ない。

目の前に広がる光景、淀んだ空、乾燥した空気、かつては形を成していたであろう建造物や舗装道路の残骸、そして荒廃した大地…。

先程までプレイしていた『フォールアウト3』の世界が広がっていた。

液晶画面越しなどではない、ホンモノの世界がだ。立ち廻くしていると、生ぬるい風が肌を打つた。

足下の石を手で拾い上げると「ゴシゴシとした感触が手に伝わっていく。

頭では有り得ないと思いつつも五感ではこれは現実だとやつ訴えてくる。

ふと自分を見てみると服装が変わっていた。

上下グレーのジャージを着ていた筈が、体はコンバットアーマーで頭はコンバットヘルメットを装備（色は、デザートカラー）していた。手にはアサルトライフルを持ち、左腕には

「これば… pi - r - boy?」

そう、この世界における高性能端末である pi - r - boy 300 0がついていた。

触れてみようとしたところで背後に気配を感じた。振り返ると何かが突っ込んできた。

「うわあっー？」

慌てて避けて突っ込んできたそれを見る。

「モ、モールラット！？」

そこにいたのは全身が爛れて赤黒く変色した大型のネズミ 通称

モールラット がいた。

モールラットはこちらを確認するとまた襲いかかってきた。  
寸でのところで避け、反撃しようとするが突然の事態にパニックになつて  
いるせいか狙いが定められない。

「……あつー？」

混乱していた為足場が悪くなっているのに気がつかなかつた。  
ひび割れた地面の段差に足を引っかけて転倒してしまつ。

それを好機と見たのか、モールラットが口を開けながら飛び掛かつ  
てきた。

裂けた口から見える唾液まみれの牙が、獲物を噛み碎かんと迫つて  
くる。

ああ、オレ死ぬのか？

ゲームしてたらいきなり訳の分からぬ状況になつて、何の抵抗も

出来ないままゲーム中では弱小の部類に入る相手に喰われるとか。  
情けなさ過ぎて涙が出るよ。

ターン、バシュンッ！

もう無理だと諦めかけたその時、遠くから何か音が聞こえた。  
次の瞬間には目の前のモールラットの頭が弾けこんでいた。

肉片を全身に浴びながら、勇は暫く動くことができなかつた。もは  
や状況に追い付けず思考がフリーズしてしまつているのだ。  
モールラットだつたモノを見て茫然としていると誰かが近づいてき  
た。

「危なかつたな、大丈夫かい？」

そこにはVault-101とロゴの入つたジャンプスーツを着て  
ハンティングライフルを構えた壮年の男性が立つていた。

## 第2話 非日常は唐突に（後書き）

いきなり死にかけた主人公。  
……これからやつてけるんでしょうか。  
書いて心配になりました。。

### 第3話 取り敢えずの方針（前書き）

亀更新ですみません。

### 第3話 取り敢えずの方針

大丈夫かい、と声を掛けられても直ぐには返答することができなかつた。

しかしそれは、命の危険に晒された恐怖心からといつわけではない。勿論それも少なからずあるのだが、それよりも彼の顔を見た瞬間の驚きの方が大きかつたのだ。

「…あ、あなたは…。」

「ああ、すまない。私はジェームズ。ただの旅人さ。」

彼はそう自己紹介した。

しかし勇は既に彼のことを知っていた。

何故なら彼ジェームズは原作に出てくる主人公の父親なのだから。

「ところで君は？」

命の恩人 ジェームズさん が聞いてきた。相手が名乗ったのに此方が名乗らないのはあまりに失礼だ。

カジマ ユウ、ここはアメリカが舞台だからユウ カジマと名乗つた方がいいかな。

……某機動戦士の実験動物部隊のパイロットさんみたいな名前だな。

「はい、ユウ カジマといいます。先程は危ないとこを助けて頂いて、本当にありがとうございます。」

「いや、いいさ。困ったときはお互い様だからね。」

なんて誠実な人だろう。

この狂氣と死の蔓延する世界でこんなにも良識のある人物はそういうだらう。

「さて、詳しい話は後でしよう。そろそろ日が傾いてきたからね。近くに休める場所があるからそこまで移動しよう。」

言われてから気がついたが、辺りは薄暗くなつてきていた。この世界には先程のモールラットのように放射能によつて突然変異した動物やレイダーという非道な無法者たちの集団があちこちにいる。そのため常に周りを警戒しなければならず、安心して休める拠点のようなものが必要不可欠なのだ。特に夜間などの視界が利かない時などは非情に危険だ。

「わかりました。宜しくお願ひします。」

こうして2人は歩き始めた。

### 第3話 取り敢えずの方針（後書き）

話が進まない…。

## 第4話 ひとまわの休息（前書き）

6月7日、1～3話修正しました。

## 第4話 ひとまずの休息

夜の帳が降りて辺りは闇に包まれていた。

人に使われなくなつて久しい嘗てハイウェイ道路だったものや元は何かの工場だつた廃墟も闇に覆われて一層不気味さを増している。時折建物の隙間を抜けていく風の音がそれに拍車をかけていた。

全てを覆つてしまつようなその暗闇の中に灯りが一つあつた。その灯りを目指して歩いている人影が二つ。まあ俺とジェームスさんなんだけど。

近づいてみると灯りは松明の炎だつた。  
そのまますぐ傍に犬が三匹と椅子に腰掛けた黒人女性がいた。

「やあ、スカベンジャー。元気だつたかい？」

「おや、ジョーモスさんかい。久しぶりだねえ。」

ジョーモスさんは彼女と顔馴染みらしい。警戒もなく親しげに話をしている。

「ところでそこのお兄さんは誰だい？ 見ない顔だねえ。」

「ああ彼はユウ カジマ君。昼間モールラットに襲われていたところを助けたんだ。」

「初めまして、ユウ カジマです。」

取り敢えず握手をと思い手を出してみる。

スカベンジャーさんは俺を見定めるように頭から爪先までをジーッと見ていたが、「まあジエームスさんが連れてきたんだから悪い子じやないだろ?」と言つて握手を返してくれた。

「さて、急で悪いんだけど何日か滞在させてもらひてもいいかな?」

「どうせ空き家ばかりだからね。好きに使つて構わないよ。」

何の話だろ?と疑問に思いながら聞いてみると、スカベンジャーさんが奥の方を指差した。

暗くて気が付かなかつたが、一軒家の家とも小屋ともつかない建物がそこかしこに点在していた。

スカベンジャーさんの話によるとここは昔小さな村だったそうだ。しかしつしか住民が離れていき廃村となつたことを自分の拠点にしたのだそうな。

「ありがとうございます。恩にきるよ。」

「やだね、こっちも助けてもらつてるんだから困つたらお互い様さね。あんたがいろんな機材や装備を持ってくれるからあたし達は大助かりだよ。」

スカベンジャー、それは彼女の名前ではない。彼女のように自分で物を集めては商売をする。ひとところに留まることもあれば各地を転々とすることもある放浪の商売人。そのような人達を総じてスカベンジャーと呼称しているのである。

「そう言つてもらえると助かるよ。」

一通りの紹介が終わつたところで食事にすることになった。

ジェームスさんは昼間のモールラット（ちゃつかり剥ぎ取つていた）の肉を焼いている。その他に荷物からきれいな水を人数分取り出して渡してくれた。

焼きあがつた肉を分担する。見た目は悪くない。油の滴るジューシーな肉料理といったところか。だがこれが昼間の変異ネズミだと思うと食欲など湧かなかつた。

「気持ちは分かるが食べておいた方がいいよ。食べれるだけまだマシな方なんだから。」

ジェームスさんの言つことも分かる。この不毛な場所で食料確保がどれだけ困難かを。

実際ここキャピタルウェイストランドで入手できる食料といえば、大半は核戦争前の保存食となつていて。他にもイモなどの野菜（ほとんどは汚染されてる）やバラモン（首が2つある変異した牛）などがあるが前者に比べて圧倒的に数が少ないのだ。

そのためモールラットのようなモンスターといえるようなものでも食料たりえるのだ。

躊躇いながらも一口かじりついてみる。  
噛んだところから肉汁が溢れ出でくる。  
悪くはないな。

食事が終わつた後で俺はジョームスさんになぜ自分があそこにいたのか一部始終を説明した。流石にゲームの世界に入つたとは言わなかつた。話がややこしくなるし、シナリオなど話してしまつたらどんな影響ができるか分かつたものじゃないからな。

「つまり君はこことは違つ世界、パラレルワールドから来たと言つんだね？」

そういうことにじておいた。どのみち到底信じられる話じゃないし、変に思われたらうづなあ。

「分かつた、取り敢えず信じることとするよ。」

「……へ？ 信じてくれるんですか？ 僕が言つのもなんですが。」

びっくりした。まさか信じてくれるなんて。

「仮にその話が嘘だとしても、僕を謀つても君には何のメリットもないだろ？」

確かにそうである。

「さて、本当に異世界から来たなりこの世界での生き方とか分かつてないだろうから、僕が教えてあげるよ。」

「いいんですか！？ ありがとうございますー。」

「でも今はもう遅いから明日にしようか。」

「分かりました。ではおやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。」

の生き方講習』が始まったのであった。

## 第4話 ひとまずの休息（後書き）

ジェームスさんから指導を受けて主人公が大分マシになる…予定です。

## 第5話 譲讓の成果（前編）

じせんくふりです。更新遅くてすみません。

## 第5話 講習の成果

甲高い金属音が辺りに広がっていく。

何度も何度も、硬いもの 同士がぶつかる音が灰色の曇り空に広がつては消え広がつては消える。

「違う！ 甲殻の隙間、柔らかい部分を狙うんだ！」

「は、はい！」

甲殻の隙間 と小声で復唱しながら手に持った物を構え直す。

右手にはコンバットナイフを、左手には10mmピストルを。鈍い光を放つ両手の得物を相手に向ける。

対する相手はほぼ全身が黒銀の甲殻に覆われていて、計8つの赤く丸い目で眼前の獲物 ユウを仕留めんと目を向けてくる。そして自慢の猛毒の尻尾を突き刺そうと振り回しながらタイミングを図っている。

今相手にしているのはラッドスコルピオンという、放射能の影響で巨大化したサソリのことである。

その中でも小振りな（それでも軽自動車ほどのサイズはある）個体の部類に入るが、だからといって侮ることなかれ。

その甲殻は大きくなるにつれて強固で頑丈な装甲となり、尻尾の毒

素は通常よりも危険な猛毒となつてゐるため、非常に恐ろしい存在なのである。

そのため尻尾の間合いに入らないよう気をつけ、遠距離から仕留めるのがセオリーというかベストといつか。

コウも先程から距離をとりつつ10mmピストルで撃ち続けていたのだが、その悉くが強固な甲殻に弾かれてしまっていた。その度に甲高い金属音が辺りに響く。

(かてえ！　このサイズで装甲車並みかよー？)

あまりの硬さに内心で悪態をつきつつも、コウの身体は動いていた。

あらうことが、コウは自分から相手に近づいていった。  
すかさず尻尾が襲つ。

紙一重でそれをかわしながら岩場のある地帯に相手を誘導していく。  
周りは断崖絶壁、前後左右逃げ場はなし。  
猛毒の毒針が突き出される。

前後も左右もダメ……なら、上からならーー！

コウは背中の壁を蹴り跳躍した。直後、すぐ下を毒針が通過し、断崖に突き刺さる。  
ラッズコルピオンの背中に着地し、コンバットナイフを振りかざす。

甲殻に覆われていらない眼の部分なり　　！！

その鋭利な凶刃がラッズコルピオンの赤い目に深々と突き刺さる。紫の体液が噴水のように溢れ、コウの頬を毒々しい色に染め上げる。余りの痛みに堪らず振りほどびいつとするが、岩に突き刺さった尻尾が抜けず身動きが取れない。

「おおおおおおおおおおおおおおおお　　！－！」

10cmペーストルを眼球に押し込む。ほぼゼロ距離で放たれた10mm弾が相手の中身をノックアウトしながら突き進んでいく。

一発、二発、三発　。

マガジン内の十一発を撃ち尽くしたころには、ラッズコルピオンは弱々しく痙攣するだけになっていた。

「いやあ、大分上達したね。凄いよ。」

「ジョーモスさんのお陰です、でも僕なんてまだまだですよ。」

（謙遜してるけどかなりの成長つぶりだよ。）

ジョーモスはこれまでのことを思い出しながらそう思った。

初めのうちは銃器や近接武器の扱い方、医療、コンピューターの操作など色々と教えたがどこかぎこちなかつた。そのうえ失敗ばかりしていた。

サイコやRAD-Xの分量を間違えて中毒になつたり、コンピューターをハッキングしたが失敗して自動ターレットに撃たれまくつたり。

戦闘でもへつぱり腰で、ラッドローチ（突然変異したゴキブリ）と戦つたときは半泣きしてて…大丈夫かこの子…とか不安に思つたものだ。

あの頃に比べればかなり変わつた。先程のようにラッドスコルピオンを一人で、それも限られた装備だけで倒せるくらいになつた。

初めは失敗ばかりしていたが、驚くほどこの作業も2回目を実

践してみると完璧にこなせたのである。

2回目だからできたとかコツを掴んだからなんて次元の話ではない。まるで長年培つてきた技術であるかのように簡単にやり遂げてしまうのだ。

「しかし君はすごいな。初めはどの作業も上手くできなかつたのに、一回目になると僕より上手にできてしまうんだから。」

「ハハ、ありがとうございます。」

彼は照れ臭そうに苦笑したあと、神妙な顔つきになる。

「……自分にもよく分からんです。教えてもらつたときは上手くできなかつたんですが、一回目は自分でも驚くほど簡単にできちゃうんです。まるで、記憶はないのに身体はその動作を覚えてるようなん……。」

そこまで話すとゴウ君はハツとして「すみません、訳の分からないこと言つて…。」と謝つてきた。

「いや、いいや。まあ何はともあれ必要な知識や動作を一度やつただけで身に付けられたんだ、いいことじゃないか。」

「はーっ！ そうですね。」

ユウ君は笑顔でそう答えてきた。ここまで素直に喜んでくれると教えた甲斐があったと嬉しくなつてくれる。

そう思いながらジエームスはもう一方で別の思考をしていた。

彼は一体何者なのだろうか

「これまでのこともそうだが、彼の p.i.p.-b.o.y を見せてもらつたときその疑問はジエームスの中で一層大きくなつた。

一見自分達が使っていたものと一緒になのだが、かなり頑丈で軽量化もされている。その上データ許容量も既製品と比べて大容量。

▼ a u l t で使用されているものより更に高性能なそれは、製造元も製造年月日も何も記載されていなかつた。

ならばと内部のデータベースにアクセスしようと 試みたが、優れた科学者であるジエームスをもつてしても破れない厳重なプロテクトがかかっていた（データ量などのパラメーターは見ることができた）。

異世界からきた、と言つていたが、ではこれは何なのだろう？

一度その疑問を投げ掛けたときがあつたが、分からぬといつ答えしか帰つてこなかつた。

まあ考へても仕方ない、か

ジヒームスはひとまず保留にしておくことにした。いずれ分かるかもしれないし、興味深くはあるが今直ぐ聞き出す」ともない。

「よし、一戻ろうか。……ん？」

スカベンジャーの廃村に戻ろうとしていると誰かが倒れているのを見つけた。

「だ、大丈夫！？」

ユウが慌てて駆け寄る。

駆け寄つてみると倒れているのは幼い少女だと分かつた。見たところかなり衰弱している。

「これは良くないね…、早く廃村に運んで治療しないと。」

ジヒームスさんが言つてはあまり思わしくないらしい。心なしか

焦りの表情が窺える。

僕たちは少女をスカベンジャーさんの所へ運ぶことにした。

## 第5話 講習の成果（後書き）

倒れていた少女は一体何者なのか……？  
次回をお待ちください。

## 第6話 少女の涙（前書き）

皆様お久しぶりです。亀更新ですみません。  
……しばっかりだな。

## 第6話 少女の涙

霧がかかっていた。

辺りは深い霧に覆われて視界が悪く、10m先の物すら視認できない。

霧のせいで分かりにくいが、周囲には大小様々な山の影が浮かんでいる。それらは機械の部品であつたり作業用ロボットの残骸であつたり、いわゆる“スクラップ”が積み重ねられたものだった。

「ハツ…ハツ…ハツ…ハツ…。」

その山々の間を二つの人影が走っていた。一人は傭兵服を着て頭には白いヘッドラップを、右目に眼帯を着けた男性、もう一人はショートな髪型の10歳にも満たないであろう可愛らしい少女だ。男性は少女の手をとり走っては時折後ろを振り返っていた。まるで何かから逃げるようになっていた。

実際彼らは追われていた。

「隠れてもムダだあ！」

「おれに見つかるとヤバいぞー。」

遠くから追いつきの声が聞こえた。段々と近づいてくるようだ。

「のままだと追いつかれる。

男性はせめてこの下だけでも逃がせないと、と考えた。

右手でホルスターからスープ付き44・マグナムを抜く。  
「……マギー、おれが連中を引き付けるから、その間に前は逃げ  
るんだ。」

「二やつー、一緒にせきなきやつよー。」

「アーリーたかあーー！」

とうとう見つかってしまったらしい。男性は覚悟を決めて銃を構えた。

「いいから行くんだーー。」

そう言い残し、男性は追っ手がいる方へ駆け出した。

「おーり、来いよー。」

「ああ、戦うぞー。」

獲物を見つけて戦意が高揚しているのか、追っ手は嬉しそうに叫んでいる。

「いやよビリー、ビリー——！——！」

「……う……ん……。」

「おや、気がついたかい？」

「……あなたは誰？」

「私はジェームス。じゃない旅人さ。」

その人はジエームスと名乗った。第一印象は『いい人』だけど、見た目くらいウエイストランドで信用ならないものはない。周りを見回してみるとこじはどいかの小屋のようだ。中は狭く自分が寝ていたベッドの他は椅子とロッカーしかない。

知らない場所、知らない相手。不安を募らせているとドアが開いて一人の少年が入ってきた。勿論見覚えはない。

「ジエームスさん、見回りしてきました」　ああ、よかつた日が覚めたんだね。」

その人はこじはどい気がつくと心配そうな顔つきで声を掛けてきた。

「悪い夢でも見てたの？　随分と魘<sup>うな</sup>されてたみたいだけど……。」

「…………悪い…………夢…………。」

言われてから考える。そう、夢を見ていた。とても大事なことの筈なのに、ちやんと思い出せない。そもそもなんで自分はこじはどるんだろう。ビリーはどうにか…ビリー…？

田覚めたばかりでぼんやりとしていた思考が一気に覚醒していく。

「エリーは、エリーさん？」

「え、エリー？」

少年は首を傾げている。ジーモスさんも同様のよつで分からないとこう顔をしていた。

「君は道端で倒れていたんだけど、他には誰もいなかつたよ。」

ジーモスさんの言葉に少女は愕然とした。ここにないのなら、ビリーは…。

「何があつたのか、話してくれるかい？」

「…はい。」

この人達に頼むしかない。そう考えて、逃げてきた少女マギーは何があつたかを語り始めた。

「つまり、君はメガトンから来たんだね。」

「…はい。」

彼女の話だと、メガトンは今レイダーの一団に占拠されてるらしい。

周囲を堅固な防壁で覆われているメガトンが、そんじょそこらのレイダーに落とされるとは考えにくいが。

「……裏切り者がいたの。」

何を血迷ったか、中から入口を開けてレイダーを招き入れた人間がいるらしい。

「あいつはみんなにお酒や食べ物を『』馳走したの。睡眠薬入りの物をね。私どビリーは自分の家で本を読んでいたから食べには行かなかつたの。」

どうやら裏切り者はメガトンの住人に薬を盛つて然したる抵抗も受けずに無血開城させたらしい。

なるほど、内側から崩されたのなら納得がいく。

どれほど堅固な防壁もそれでは意味を為さないのだから。

「異変に気づいたビリーは私を連れて秘密の入口から外に出たの。そのとき見つかっちゃって、私を逃がすためにビリーは一人で戦つて……。」

そこまで説明すると、マギーは急に黙ってしまった。苦しい表情で口を接ぐんでいたが、決心したのか口を開く。

「勝手なお願いのは分かつて。でも……。」

再び沈黙が訪れる。

「……でも、あそこにいるのは私の友達、うつん家族なのよ！お願い、みんなを助けて！！」

涙を流しながら懇願するマギーを見て、ジェームスは考える。いくら内通者がいたからといって、も相手はメガトンを制圧したのだ。決して少人数ではないだろう。対してこちらはたったの二人。装備は負けてないが、このままではかなり不利だ。

「ジェームスさん。何とか助けられませんかね？」

ユウが不安げな顔で聞いてくる。ジェームスは考える。p.p.b  
○のアノ機能を使えば何とかなるか、と。

「うん、困ってる子がいたら助けてあげないとね。」

その言葉にパツと顔を明るくするマギー。

「うんうん、それでこそあんた達男だよ。こんな可愛い女の子が涙溜めながら必死にお願いしてるんだ。助けなきゃ男じゃないよ。」

ギイ、ヒドアが開きスカベンジャーさんが入ってきてそう言った。  
その手には幾つかの道具が抱えられている。

「餓別だよ、持つていきな。」

そう言つて渡されたのはステイムパック、血液パック、モルバイン、  
弾薬、食糧、そして

「これは…ステルスボーイじゃないか…?」

ジエームスさんが驚いている。それもそのはず、ステルスボーイは  
携行式の光学迷彩装置でゲーム中でも中々入手できない レアなア  
イテムなのだ。

戦前の技術で造られたこの装置はウェイストランドにおいても現

存しているものは少なく、稀少価値の高い代物などがスカベンジャーはそれを無償で提供しようとしたのだ。それも三つもだ。

「あんた達には世話をこなってるからねえ。それにこんな幼い子に家族を失うような悲しい想いはさせたくないんだよ。」

そう答える彼女の瞳には、どこか哀しげな光が宿っていた。もしかしたら過去にそういう出来事があったのかもしれない。

「さあや、お喋りはここまでにしてさつと準備を始めようじやないか。早くこの子を安心させてあげないとねえ！」

そう意気込んだスカベンジャーさんの顔には既にさつきまでの哀しげな表情は無くなっていた。

ひつして何故かスカベンジャーさん主導のもと『メガトン解放作戦』の準備が進められたのであった。

## 第6話 少女の涙（後書き）

倒れていた少女はマギーでした。  
というわけで、次回はプレイした人なら一度は立ち寄る（多分）あの街へ！

## 第7話 メガトン救出作戦その1（前書き）

えー…更新遅れて申し訳ございません。第7話です。

## 第7話 メガトン救出作戦その1

メガトン。

キャピタルウェイストランドのほぼ中心に位置する、四方を防壁に囲まれた街だ。

元々はそこには何もなかつた。200年前の全面核戦争が始まつて少し後、Vaultに入れなかつた一般市民が投下されたが不発だつた核爆弾の側に集まつていき飛行機や車の部品、廃材などを利用して組み立てたのが始まりだつた。

初めは核爆弾の回りにテントが点々と張られているだけのこじんまりとしたものだつたが、徐々に人が集まり使えそうな部品を探しては壁を作り家々を建てていき、どんどん大きくなつていった。

そうして出来た外壁の周辺には、使えなかつたり余つた部品の山々が大小幾つもある。

その中には廃品部品や廃電子機器、修理すれば動かせるロボットなど様々な物が埋まつていて、これらがメガトンを運営していくための主な資金源となつていて。閑話休題。

さて、長い年月を経て組み上げられた絶壁は内側にいる住人を外敵から守り続けてきた。

その高く分厚い防壁に庇護され、昼も夜も静かな時が流れるメガトンであつたのだが、今はなにやら様子が違う。

今は夜。普段なら殆どの住人は自分の家に戻つているのだが町の中心近くにある食堂は大勢の人で溢れかえり喧騒が広がつていた。

時折怒号なども飛んでいるが他の者は特に気にした風もなく自分に宛がわれた食い物や酒をがつついでいた。

「あ～うめえー。こここの連中こんないいもん食つてやがったのか！」

「全くだな、オレたちなんか食い物に困つたときはその辺の人間捌いて喰らつてたつてのによ。」

「まあいいじやねえか。この場所はもつオレたちのモンだ。これからはこいつちが楽しむ番だろ？」

「へへっ、違えねえ。」

男たちの話を聞いて周りの連中から卑下た笑いが上がる。

話の内容から分かるように、彼らはここメガトンの本来の住人ではない。今町の中を歩いているのは非道、無法者で知られるレイダー達である。

数日前、たつた一人の青年の裏切りによつてこのメガトンは彼らの手に落ちたのだ。以来、レイダー達はこいつして蓄えられた食糧や酒で好き放題していた。

前にいた場所よりも立派な拠点／住み処を手に入れて彼らは上機嫌だつた。その為か、周辺の警戒を全くといつていいほどしていなかつた。

だがそれも仕方がないのかもしない。ここメガトンの周辺には大きな脅威は存在しない。核爆弾があるためか誰も近づこうとしないからだ。モンスターにしてもモールラットやブロートフライ（突然変異したハエ）のような小型のものが殆どを占めるため、気にする必要もない。彼らはそう考えていた。

その考えが自分達を絶望のドン底に叩き落とすことになることを、今の彼らには想像すらできなかつた。

新たな住人がばか騒ぎする食堂から離れた場所にある一角。あちらと違つてここには人影がなく継ぎ接ぎのよつた壁が静かに佇んでいた。

その一部がズズズツと小さな音をたてながら動き出す。そこから二つの人影が現れた。一人はサンドブラウンのコンバットアーマーを着こんだ青年。もう一人はスカート姿の年端もいかない少女だ。

「ふう、潜入成功だね。でもこんな入口があるとはね……。」

「私もこの間見つけたの。どうやら取り付けが甘かったみたいね。」

：メガトンを建造した先人の中には手抜きをしてた人がいたようです。  
まあそのお陰で助かつてるけど。

そんなことを考えながらアーマーを着た青年　　ユウは懐から携帯電話くらいの大きさの機器を取り出す。

「……大佐、潜入に成功した。」

『……大佐って誰だい？まあいい、合図があるまで待機してくれるかい？言つておくけどこれはスニーキングミッションだ。くれぐれも見つからないようにね。』

「了解。」

ピッ

ジエームスさん製作の簡易無線機で通信をする。……しかしあはり通じないか、分かつても寂しいな。

「しょうがない、合図があるまで隠れていよう。」

「大佐ってだあれ？」

「その話はいいから。」

マギーの質問を受け流しつつ、見える範囲で周囲を観察する。

街の真ん中近くの食堂には十数人のレイダーが集まり飲み食いしている。上の階層にある建物には見張りだらうか、レイダーがドアの前で一人やるせない感じで立っている。

恐らくあそこに住人を閉じ込めているのだろう。

情報を集めようと周囲を調べていると、その建物に歩いて向かう三人のレイダーが目に映った。

一人は前を歩き、もう二人はそれに付き従っている。先頭の人物は他のレイダーとは別格のようだ。見張りのレイダーが慌てて背筋を正していた。

「あ……あいつは……！？」

「知っているのか、ライデー！」

オレが喋り終わる前にマギーはその建物目掛けて飛び出していった……ってオイ！？

スルーされた、じゃなくていきなり出でていつたら不味いでしょー放つておくわけにもいかないので、自らも後を追う。しかし普段は大人しいマギーがあそこまで取り乱すなんて何者だらう？

とりあえずオレ達は見張りのいる建物の横まできた。ああ、移動中はスカベンジャーさんから貰ったステルスボーイを起動したので難なく近づけたよ。

マギーも起動させていたから少しは冷静さが残つてるようで安心し

た。

さつき見かけた三人は中に入ったようで、見張りだけが相変わらず面白くなさそうな顔で立っている。

クイクイツ

「ん？」

マギーが服の袖を引っ張る。

「ねえ、何か食べ物ある？　いい作戦があるんだけど。」

「……はあ、折角メガトンを手に入れて贅沢できるのに何でオレだけ見張りなんざやらなきゃなんねえんだよ。」

彼はリーダーから見張りをするように言われ、不本意ながらもここに立っていた。内心は断りたい一心で一杯だったが、自分達のリーダーは歯向かう者は容赦なく殺すことを知っているため泣々引き受けたのだ。

本当なら今頃自分もあの食堂でばか騒ぎをしていた筈なのに、と考えて溜め息を漏らす。楽しんでいる他の連中を見て、差し入れの一

つでも持つてこいつてんだと悪態をつく。ここ最近録な食事にありつけず、メガトンに入つてからも、駆走を田の前にしながらリーダーの言い付けのせいでお預けの状態。不満一杯の彼の心情を表してか、腹の虫が激しく泣き出す。

コトツ

「んあ？」

音のした方に田を向けると、床に食料が落ちていた。辺りを見回すが誰もない。

もう一度キヨロキヨロと辺りを見回してから、

「誰もいねえんならオレが食つちまつても問題ねえよな。」

と言つて拾い物の包装を解く。中身は即席ポテトだった。

本来なら袋から取り出した後磨り潰してマッシュパテにしてから食べるものが、彼は塊のままかぶりついた。空腹の彼には調理などという過程は要らず、ただ腹が膨れればいいという考え方だからだ。

「ん？ 何か固い部分が…。」

咀嚼しているとガリッという音が口内から聞こえたが、見張りは構

わず飲み込む。食べたという満足感に浸つていてるとき異変は起きた。彼の表情が幸せそうなそれから徐々に苦悶のそれに代わり始めたかと思つと、自身の腹部を押さえて悶え始めた。顔面からは異常なまでの汗が流れ、顔の色も心なしか蒼白くなつていい。

(は、腹がああああ！？)

突然の激痛に焦る彼の腹からは先程の腹の虫とは別種の音が鳴り響いていい。

早くトイレに行かなければ！！ 身体からは危険信号とともにそんなメッセージが送られてくるが、ここを勝手に離れるわけにはいかないと最後の理性が押し留める。

少しの間留まつたようだつたが、危険信号が理性を上回つたのかトイレの方向に駆け出していく。

「……何混ぜたんだ？」

「下剤。モイラさんから貰つたやつ。男子とかに苛められたら使いなさいつてくれたの。」

……流石モイラさんだ。やることがえげつないぜ。

見張りがいなくなつたので扉まで近づき扉の窓から中を窺う。室内ではレイダーの青年と繩で縛られたテンガロンハットを被つた男

が話している所だった。

## 第7話 メガトン救出作戦その1（後書き）

お久しぶりです。気分屋です。前回の更新からかなり経ってしまいました。 原因は私の文章力不足とモチベーションです。名前通りの気分屋ですみません。これからもこのようなことがあるかもしれませんが、精一杯書きますので宜しくお願いします。

さて、第7話を投稿したわけですが何か酷い出来ですね。改めて自分の文章力のなさにショックを受けました。次回はもっといい感じの文章にしたいなあ…。

## 第8話 メガトン救出作戦その2（前書き）

更新です。今回は一話投稿します。

## 第8話 メガトン救出作戦その2

「やあルーカスさん。気分はいかがですか？」

「……このオレが気分最高だ、ヒヤツハー！…ってな感じに見えるのか？もしさうなら病院に行くのをお薦めするぜ。ポッポよお…。」

ポッポと呼ばれたレイダーの青年の言葉にテンガロンハットを被つた男　“自称”保安官のルーカス・シムズは憎々しげに答える。

「そんなこと言わないで下さいよ。せっかく心配で様子を見にきたのに。」

ケタケタと笑いながら話す青年とは対称的に、ルーカスの表情はどんどん憎しみで歪んでいく。ルーカスだけではない。彼の後ろで同じように縄で縛られている他の住人も同様に顔を歪めて彼を睨んでいた。

「心配だと…？　オレ達をレイダーなんかに売りやがって、裏切り者がどの面をあげて言いやがる！？」

そう、ルーカスの言う通り彼はレイダーを招き入れた張本人である。にも拘わらず当の本人は「裏切り者?」と言いながら分からないといった顔をしていた。かと思うと何か合点がいったのか手をポンと叩いて話す。

「ああ、僕は裏切りなんてしてませんよ。」

「キサマ、ふわ」

「だつて」

ルーカスが叫ぼうとしたのを遮ってポツポツは話す。

「僕はこれからこちらの人間なんですから。」

「……何……!？」

その言葉にルーカスをはじめ縛られた住人のあちこちから驚愕やどよめきが起る。

「一年前、僕はメガトンの前で倒れていたところをあなた方に助けて頂きました。その恩に報いるため仕事を手伝い食糧を提供したり

し、皆さんと交流を深めていきました。」「

室内にはポツポの声だけが響いていた。他の者はただ黙つて彼の言葉に耳を傾けている。そのことに満足したのか、彼は口元に微笑を浮かべながら更に言葉を紡いでいく。

「しかしそれが罷だつたのです。巨大な壁に護られた難攻不落の街、メガトンを内部から突き崩そうと画策する、このスプリングベール地区のレイダー頭目ポツポのね！」「

自分の演説に寄つているのか今度は身振り手振りも加えて語り出した。

「これをお覚えていますか、ルーカスさん？」

そう言つて懐から取り出したのは細長いラジコンのコントローラーのようなもの。ルーカスには見覚えがあった。ポツポを助けた少し後に核爆弾の問題を話したら起爆装置解除用のツールを作ると言つて出来上がったのがそれだった。

「それは起爆装置解除用の……」

「実はこれ解除用ではなく起爆用のツールなんですよ。」「

「なんだと！？」

その言葉に驚くのは当たり前だ。自分の拠点にある核爆弾を解除するどころか起爆装置を取り付けてしまつなんて狂氣の沙汰だ。

「これは一種の保険みたいなものです。」

「保険……？」

「はい、近々私はヨーロジー・ジョーンズの所に商談をしに行こうと思つてまして……。」

ヨーロジーの名前が出た途端住人達の顔色が変わった。ヨーロジー・ジョーンズといえばキャピタルウェイストランドで最も有名な奴隸商人である。それ故容易に想像できる、彼の言ひ商談の商品が自分達であることを。

「その間にここを空けることになります。あなた方は血氣盛んな方々ばかりですから罷り間違つて反乱でも起こされたら困りますし、折角の商品を処分するような真似もしたくないんですよ。」

「…つまり仮に俺達がここを取り返しても核で吹き飛ばせるから抵抗は無駄だと…？」

「そうです。流石ルーカスさん、話が早くて助かります。」

ルーカスに向かつてにっこりと微笑んだ後、ポツポは得意気に起爆ツールの説明を始めた。それによると、装置の動作は彼の持つツールと核爆弾に取り付けたコンソールでできるらしい。ただし、コンソールのほうはパスワードが必要でそれは彼以外は知らず、また下手に弄くつたり損傷を与えると起爆シーケンスが始まる仕組みになつているため、触れないほうが身のためだという。

「勿論監視用のアイボット（小型の浮遊型メカ）を配備した後で発します。これの映し出した映像は直ぐに僕の元に届きますから抵抗しても無駄ですよ。まあこの人数のレイダーを相手に録な武器もなく勝てるとは思えませんがね。」

これまでの話を聞いて住人達の顔からは希望が無くなっていた。皆が絶望にうちひしがれているなか、押し黙つていたルーカスが口を開いた。

「……マギーとビリーはどうなった…？」

その言葉に他の者がハツと気付く。パーティーが開かれた日この二人は何とか逃げ出すことが出来たがレイダーから追つ手がかかっていたのだ。

「…ああ、ビリーはここにいますよ。マギーは見つからなかつたそ  
うですから今頃は…。」

最後まで言わなくともルーカスには彼の言おつとしていることが分  
かった。年端のいかない少女が一人で生きられるほどウェイストラ  
ンドは生易しくはない。どこかで力尽きているかもしぬれ、モン  
スターに襲われたかもしぬれ。どのみち死んでいるだろう、彼は  
そう考へてゐるのだ。

「あの一人にもパーティーには参加してほしかつたんですけどね、  
残念です。折角感謝の気持ちを表して最後の晩餐を開いたというの  
に。」

一人ともいい値で売れたうつになあ、と呟きながらポツポツは出入  
口に向かう。

「では準備に取り掛かりますので失礼します。最後にパーティーの  
時にも言いましたがお礼を言わせて下さい。」

住人全員を見渡してから顔には歪んだ笑みを讃えてお礼の言葉を述  
べる。

「ありがとうございます。僕信じて、受け入れてくれて。お陰で

簡単に」とは済みましたよ。」

彼らが出ていった後部屋には希望を失った住人達と重苦しい絶望だけが残された。

「んん？ 見張りがいませんね。しょうがないな、キミ変わりにやつてください。」

「わかりやした。」

勝手にいなくなつた見張りへの罰を考えながら付き添いの一人に命令するポッポ。そして残りの一人を引き連れてどこかへ歩いていく。コウとマギーはそれを物陰から眺める。目で追っていくと着いたのは核爆弾だった。

「気分はいかがですか？」

一体誰に話しているのだろう、そう思つて目を凝らして見てみると侵入したときは暗くて分からなかつたがそこには鎖で核爆弾に手を繫がれている一人の男性がいた。

「… フ… ビ… ムグツ… ?」

その人物を見てマギーが叫びそうになつたのをユウが慌てて口を塞ぐ。幸い新たな見張りには気づかれなかつたようだ。しかし叫びそうになるのも無理はない、その人物とはマギーの最も大切な家族、ビリー・クリールだつたのだから。

「…………。」

「返事も返してくれないのでしょうか、悲しいですねえ。」

話しかけられたビリーからは返答がない。だがそれも彼の姿を見れば一目瞭然だ。核爆弾の落ちた所はクレーターとなつていて長い年月で雨水が溜まり放射能汚染された水溜まりとなつてゐる。そこに浸かる形で繫がれている彼のいつも着ている傭兵服は弾痕や切り傷でボロ雑巾のようで、破れたポケットからは弾丸が零れて水溜まりの中に沈んでいる。真っ白だったヘッドラップも血が滲んでどす黒くなつてゐる。満身創痍な上にいつからそこにいるのかは分からぬが、汚染された水に浸かっているのだ。ジワリジワリと放射能レベルが上がつてゐるだらうそんな状態で普通に受け答えできるわけがない。

「マギーさんは残念ながら見つかりませんでしたよ。」

返事がなくとも構わず話し続けるポツポ。

「彼女なら幼くて可愛らしくていい値段で売れたでしょうに、実に惜しいことをしました。」

やれやれといった感じで首を竦めてみせる。言葉とは裏腹にその態度は軽い。彼にとつては沢山の商品のうちの一つでしかないのだから死んでしまってもそれほど惜ではないらしい。

「……それとあなたには見せしめのためこのまま死んでもらいますよ。ここまで反抗的ですと卖れたときクレームをつけられるかもしれませんしね。」

そう、ビリーは捕まつてからもずっと反抗的な態度を崩さなかつた。仮にこのまま売り飛ばしても出荷先で問題を起こすのは目に見えているので、それならばと他の住人から希望を奪うための見せしめに利用しようとしたポップは考えていた。

「自分の最期くらいは決めさせてあげましょ。このまま放射能でじわじわ死んでいきますか？ それとも

そう言って腰のホルスターにある中国軍ピストルを抜きビリーに銃口をむける。

「僕の手にかかり楽になりますか？」

ビリーは何も答えない。ポツポの引き金にかけた指に力が少しづつ  
込められる。

(……ビリー———!—)

少女が心の中で悲鳴をあげる。トリガーが引き抜かれようとしたそ  
のとき、爆発音とともにメガトン全体を巨大な振動が揺らした。

## 第8話 メガトン救出作戦その2（後書き）

流石に無理矢理な流れですかね…。ビリーの運命や如何に…?

## 第9話 メガトン救出作戦その3（前書き）

どうなるメガトン…?  
メガトン編その3です。

## 第9話 メガトン救出作戦その3

突然の激しい揺れに宴を楽しんでいたレイダー達は浮き足立つていた。何が起きたのか、揺れの原因は何かを確かめるため皆あちらこちらへと走り回っていた。読みかけの本を投げ捨て宛がわれた家から外に飛び出した彼女、スプリングベール地区では副リーダーにあたるキャスもその一人だつた。

「何が起きたの！？」

「わかりやせん…。しかしあの爆発音とほぼ同時に起きた『カイヨレ…』…けつこうついですぜ。」

「姉御、あれを！」

近くにいた部下と話していると別のレイダーが何かを指差して叫んだ。

指された方を見てみると壁の向こうに巨大な黒煙が立ち上っていた。煙とともに赤い火の粉が舞っているのを見るあたり、どうやらスクラップ置場のあたりで爆発があつたようだ。

「何をボケツと突つ立つているんです！？ 早く火を消しに行きな

さい……

声のした方を見ると我等がリーダーのポッポが回りの連中に怒鳴り散らしている。彼の近くには捕まつてからも反抗的だつた眼帯の男がいる。虫の息だがまだ生きているようだ。

「あそこにある部品だけでもかなりの利益になるんですよー? 全員で被害の拡大を防ぐんです!—」

「待ちなよポッポ。幾ら何でも全員は不味いよ。念のため何人かは警護に残して 」

「いこいら一帯には大した脅威はありません! ともかく火を消すんです!」

「……了解。」

とりつく島もないポッポの態度に何かを言いかけようとしたがやめ部下を集めて現場に向かう。念のため二十人のうち四人を残しておく。

このときポッポが冷静に指揮をしていれば、そしてキャスのいう通り警護に人員を割いていれば違う展開になっていたかもしれない。自分達が破滅の道を辿っていることを彼らはまだ知らない。

（あ、危なかつた……）

あの爆発（合図）がもう少し遅ければビリーは殺されていた。ナ  
イスタイミングだジエームスさん。マギーと一緒に胸を撫で下ろす。  
と、こんなことしてると場合じゃないな。

「マギー、作戦開始だ。街の皆を助け出してくれ。」

「でもビリーが……」

「あいつのことは任せてくれ。必ず助ける。」

少しの間黙っていたが「……分かった。」と言ひて駆け出していく。  
素直に納得してくれて助かった。どう説得しようか悩んでたんだ。  
さて、助けに行きますかね。

今気がついたけど先程までいたボッポの姿が見えない。どこにい  
つたかと探してみるとメガトンの上層、位置的には出入口の門より  
上にある見張り台にぼじ登り、手にした双眼鏡で外の様子を見てい  
た。他にも火の手が上がってないかと慌てふためいて外に気を配つ  
ている。そのお陰で中までは気が回らないようで、ゆっくり救出作  
業ができる。これぞまさしく灯台もと暗しだな。

そんなことを考えながらビリーを繋いでいる鎖を外そうと彼に近寄る。

自身に近づくものを感じたのかビリーは身動きした。

「『安心下さい。あなたを助けにきた者です。』

返事はないが聞こえているようで、少しだけ警戒を解いてくれた。オレはポケットからヘアピンを取り出し、腕輪の鍵穴にピッキングで解除を試みた。

「…………なぜ？」

ビリーが呟いた言葉の意図が分からず少し固まつてしまつたが何故助けるのかと聞いているのを理解したのでこいつ答えた。

「マギーに頼まれたんですよ。大切な家族を助けてって。泣きながらね。」

「…………マギーが？」

マギーの名前を聞いたとき、虚ろだった目に少しだけ光が戻ったのをオレは見た。

門から出たあとキャス達は爆発の起きた場所へ駆けつけていた。火の手は思ったより拡がっていて消火するには少し時間がかかりそうだ。

「お前達は消火器で火を消せ！　他の者は消火ホースのノズルを」

## ビショニッ

キャスが指示をしている最中、何か音がした。振り返ると初めに指示を下した部下の一人がいない。もう一人も何が起きたのかわからずただ呆然と立っていた。よく見てみると消えた部下がいた所には灰の山ができていた。それを見てキャスは漸く何が起こったのかを理解した。

「敵襲だーー！　隠れろーー！」

部下に呼び掛けた途端燃え盛る炎の向こうから赤い光が伸びてきた。それはレーザーの光だった。先程消えた部下はレーザー光線に直

撃して灰にされたのだ。

キャスはアサルトライフルを構えてスクラップの陰から様子を窺う。炎の壁の向こうには何体かのプロテクトロンの他にもカメラアイの光源が確認できた。正確な数は分からぬが、かなりの数のようだ。この辺りにはそのような大規模な敵勢力はない筈なのだが、ならば目の前にいるあれらはいつたい何者なのだろう。

思案している間もレーザーが放たれる。自身が隠れているスクラップの山にも数発当たり、その内の一発が鼻先を掠めたときキャスは詮索をやめて部下に指示を出していた。

「相手の数は多いが怯むな！ 連中射撃の精度がかなり悪いぞ。当たらなければどうということはない！」

彼女のいう通りレーザーの精度は悪く、殆どは見当違いの方向を撃っていた。そのことに気づいた部下が反撃を始める。

長い夜になりそうだな

そう考へながらキャスもライフルの狙いを定め引き金を引いた。

何やら外が騒がしいな。さつきの爆発と何か関係があるんだろうか。見張りに立っていた者も何処かへ行ってしまったようだし、行

動を起こすなら今だ…がどうする？

ルーカスは何とか逃げられないものかと考えを巡らせるが、中々いい案が浮かばない。頭を悩ませているとガチャリとドアノブが回った。見張りが戻ってきたのだろうか？

そう思い身構えていたが

開いたドアの先には誰もおらず、夜の暗闇と向こう側にある家屋の明かりが見えるだけだった。不審に思っているとドアがひとりでに閉まつた。住人達には何が何だか分からなかつたが、次に聞こえた声にその疑問は搔き消されていた。

「皆、大丈夫！？」

「その声…マギーなのか！？　どこにいるんだ！？」

問い合わせたあと、彼らの目の前にマギーが姿を現した。

「助けにきたよー」

「馬鹿、何で戻ってきたんだ！？　お前一人じゃ無茶だ！！」

確かに一人なら不可能だろう。むしろ捕まつてしまつるのは田に見えている。だが

「大丈夫、一人じゃないよ。他にも頼りになる仲間がいるから。」

今の彼女は一人じゃない。危険を省みず助けてくれる人がいる。だから大丈夫、と彼女の目が語っていた。

マギーに拘束を解いてもらつた住人達はこれからどうするかを話し合つ。マギーからメガトン内部の戦力が手薄になつていると聞き、その結果、武器庫を奪い返して奴等を撃退しようということで話が纏まつた。

少しずつだが、希望が見えてきたな

ルーカスはそう思い、口許に笑みを浮かべて武器庫へと向かつた。

## 第9話 メガトン救出作戦その3（後書き）

内容が安直すぎたかなあ。気分屋のキャパシティではこんなのはしか書けません…。

第10話 メガトン救出作戦その4（前書き）

更新です。

## 第10話 メガトン救出作戦その4

どうしてこうなった。.

「……お、おい……何だよあの数……。」

「.....オレに聞くなよ...」の辺にあんな数の敵がいるなんて聞いてねえんだからよ...。」

後ろで部下一人がそんなやり取りをしているが、それに答えてやることは僕にはできない。これだけ大規模な集団がこの近くにいたなんてここメガトンに一年いた僕でさえ聞いたことがないのだから。

眼窩では暗闇の中伸びる赤いレーザー光と発砲音とともに生まれるマズルフラッシュが各所で光つては消え光つては消える。キャス達は善戦しているようで戦闘開始から數十分経った今も敵は前衛が戦闘状態に入っているが後方の集団には動きがない。

「…」レーダー?」「ハルク君、何が?」

先程話していた部下の一人がそう問い合わせてくるが、答えられるわ

けがない。リーダーの座についてから今日までこんな事態に直面したことなんてないんだぞ！？ どうすればいい？ どうすればつ！？

「リーダー！ た、大変ですっ！！」

想定外の事態に対応できず困惑しているとメガトン内に残っていた別の部下が慌てて此方に駆けてきた。これ以上の厄介事は勘弁願いたいのだが、部下の慌て用は尋常ではなかつた。

「一体何ですか！？ 」の大変なとき！』

「捕らえてた住人が逃げ出したんです！ 連中ビックり武器庫に向かってるよつで…！」

部下の報告に思わず絶句する。

「見張りは…見張りは何をしていたんです！？」

「い、いや他にも被害がないか探せとリーダーが命じられたんで…。

「

そうだった。言われてから思い出したが自分がそう命じたのだった。

自らの失態に歯噛みしながら武器庫のある方向に目を向けると、住人達がそちらに駆けていくのが確認できた。その中にもう死んだと思つていた少女の姿を見つけたとき、ポツポは驚愕した。

どうやら厄介事が増えたようだ…。その場にいた四人に脱走を阻止するよう命じると手下達はすぐさま住人の後を追いかけていった。

「……さて、これからどうしたものか うわっ！？」

これから行動について思案しようとした矢先、衝撃が彼を襲つた。突然の衝撃に思わず尻餅をついてしまう。慌てて辺りを見るがその場には自分以外誰もいなかつた。

所変わつてここはメガトンの外。謎の敵勢力とレイダーの鬭いは今も続いていた。ポツポの言う通りレイダー側は確かに善戦しているが、決して無傷ではなかつた。幾条もの赤い矢の雨に晒され、初めはキヤスを含め十六人ほどいたのが既に半数を数えるほどに減つてしまつていた。

「…ぐあつー？」

銃声とともにまた一人部下が倒される。そう、レーザーではなく銃弾でだ。実は戦闘開始から今まで倒れた仲間のうち七人は銃でやられている。レーザーは前述の通り雨と形容してもいいくらい

何発も放たれていたが、やはり精度は悪く当たっていない。逆に銃の方は、恐ろしく正確で、炎上したスクラップという光源があるとはいえる。ここまで的確な狙いをつけられるとは相手には余程凄腕の狙撃主がいるのだろう。

「このままだとマズイわね……。

現状を分析していたキャスはこのままで全滅することを悟った。味方はあと七人……いや、戦力的には六人か。“アレ”は使い物になりそうにないし……。そんな風に思いながらその人物の方へ目を向ける。

「……ぐおお、腹があ……。」

そこには顔面蒼白で腹を押さえて激しく悶えている男性レイダーがいた。本人の話によると、見張りをしていたときに拾い食いして腹を下してトイレに向かう途中ポツポツに捕まつたそうだ。そして火を消すのを手伝つてこいと無理矢理向かわされたらしい。

「こんな状態で何ができるつでのよ。

内心でポツポツに悪態をつく。生まれたての小鹿みたいに足を力く力くさせているこの男が何かの役に立つとは思えない。寧ろ邪魔になるだけだろうに我らがリーダーにはそんなことすら分からぬらし

い。

「…あ、姉御……姉御……」

此方に近づいて助けを求めてくるがどうしようもないで軽くあしらつ。他の連中の所にも行つてこるが相手にされていない。

「ううとおじいな、その辺でやつちまえよ……」

堪り兼ねた一人が怒鳴るがこの弾幕の中を行くのは自殺行為だらう。

「…………」

「祈れ……」

「何にだよ……！　神……紙……！」

また「うつむき近づいてきたので突き飛ばしてやつたが、どうやらひんれで限界を越えてしまつたらしく」。

「…ク…クリ…ア…」。

やりやがった…。すかさず辺りに異臭が充満する。本人は後悔と開放感の入り交じった何とも言えない表情をしている。

「何やつてるの… 風下へ行きなさい…」

そう言った矢先、右腕を衝撃が襲つた。続いてきた痛みに顔をしかめて、漸く自分が狙撃主に撃たれたのだと認識した。

「姉御！ 大丈夫ですか…！？」

「こままじや全滅だわ…。一時メガトンまで撤退！ 急げ！」

命令を聞くや否や部下達は我先に駆け出していった。レイダー側が敗走したことにより、メガトン外部での戦いは謎の勢力の勝利で幕を閉じた。

「…チツ、あいつらもひきやがつた。」

そう言つてルーカスが見やる方向からは四人のレイダーが此方に駆けてきていた。その手には中国軍ピストルや10mmサブマシンガン、金属パイプにコンバットショットガンと思い思いの武器が握られている。対するこちらは武器庫に蓄えられていた10mmピストル十数挺とコンバットナイフ數本、それとスナイパー・ライフルとハントティングライフルが一挺ずつだ。

人数や武器ではこちらに分があるかもしれないが、個々の戦闘能力では相手の方が上手だろう。メガトンの住人は戦闘を経験したことがあまりなく、対するレイダーは闘争と殺戮の毎日を過ごしているのだから戦闘経験の差は如何ともし難い。

「来るぞ。相手は四人、油断するなよ！」

ルーカスが皆に向かつて注意を促す。皆一様に頷いて氣を引き締めている中、一人だけ戦列から離れようとする者がいた。

「オレは抜けさせてもらひつぜ。」

「何故だ、モリアーティ。今は戦わねばならないときだらう！？」

抜けようとしたのは酒場の店主のコリン・モリアーティだった。

「戦うときだらうが何だらうが命あつての物種でね。第一オレは酒場の店主だぞ、戦闘なんて専門外だ。」

そう言つて武器庫からでようとしないモリアーテイを見てルーカスが何かを言いかけようとする前に、マギーが口を開いた。

「モリアーテイおじさん、その胸につけてるは何なの？」

マギーが指を指した所には何やら『K・M』と書かれた橢円形のワッペンが貼られていた。

「おお、これが？ これは通称『リン・モリアーテイ印よ！ 戦前のブランドみたいな感じで売れば儲かるかと思つてな。これが付いてる酒はみんなウチの品つてわけよ！」

気づいてくれたのが嬉しかったのか熱が入つた感じで解説するモリアーテイだったが、マギーの次の発言で凍りついてしまった。

「ふーん、じゃああそこは食堂に並んでる那些瓶は全部おじさんの店の品つて訳ね？」

硬直から立ち直つたモリアーテイは慌てて身を乗り出して食堂を見る。そこにマギーの言つとおり彼ご自慢の『K・M印』がデカデカと貼られた 酒の空き瓶が至るところに見受けられた。

「……やつぱり戦わしてもいいぜ。あの腐れレイダーども、人の酒に手を出しあがって……地獄見せてやるあいつ……」

ワナワナと肩を震わせて意氣込むモリアーテイ。それを見て苦笑するルーカスがマギーに目を向けると、ちらに向かってブイサインをしていた。彼女の人に乗せる上手さに舌を巻いたルーカスであった。

リーダーから命令を受けて武器庫に向かつていたレイダー四人は辿り着いた途端銃弾の嵐に見舞われた。慌てて建物の陰に身を隠す。ここは別れて近づこう、と年長のレイダーが指示を出し一人一組になつて左右から接近を試みる。時折反撃しては銃撃の間隙を縫つて徐々に距離を詰めていく。年長のレイダーはもう一人と共に左側から近づく。曲がり角を曲がったそのとき後ろから鈍い音と悲鳴が聞こえ、曲がり角を戻つてみるともう一人が倒れていた。

「どうしたんだ!? 何があつた!/?」

駆け寄つて聞いてみると意識が朦朧としているのかうまく答えられないようだ。

「…よ、酔つ払いが…酔つ払いが…。」

漸く出たその言葉は理解に苦しむものだつた。その言葉の意味を聞  
じつとしたとや、上に何かの気配を感じた。

田を向けたときには遅かつた。彼が田にしたのは、右手に持つた  
酒瓶を自分に向けて降り下ろす中年の姿だつた。瓶はレイダーの頭  
に直撃し、粉々になり中身のアルコールとガラス片を辺りにぶちま  
けた。レイダーはその場に倒れ込み、その拍子に手からコンバット  
ショットガンが滑り落ちた。

「てめえら酒が飲みてえんなら浴びるほど飲みてえよなあ…どうだ  
頭から浴びた氣分は、ええ？ ヒック！？」

そう言いながらもう片方の酒をラップ飲みする酔つ払いのオッサン  
…もといコリン・モリアーテイ。

「…………この酔つ払いがあ——！」

やつと意識がハツキリしたのか、もう一人が起き上がりモリアーテ  
イ田掛けて金属パイプを振るう。それが当たる前にモリアーテイは  
懐からライターを取りだし火をつけ、口に含んでいた酒を吹き付け  
た。

「ぐあああつー!？」

ライターの火に引火したアルコールが業火となつてレイダーに襲い掛かり、一時的に視界を潰す。すかさず顔面に鉄拳を見舞つて沈める。

「へつー… もまあみやがれー!..」

「ギャツー!」「グワアー!」

右側から近づこうとした一人は弾幕で近づけずにいるところを死角から狙つたルーカスのハンティングライフルと元レイダーのジェリ「愛用のスナイパーライフルの前に倒されていた。まだ息はあるようだが戦闘続行は不可能だろう。

「よし、これでー！」

「きやあつー!？」

「ー?」

片付いたな、と言おうとした瞬間マギーの悲鳴が聞こえた。悲鳴の

した方をみるとマギーを人質に取つて銃をこちらに向けているポップの姿があった。

## 第10話 メガトン救出作戦その5（前書き）

出来ましたので投稿です。

## 第10話 メガトン救出作戦その5

迂闊だった。まだ頭目がいたのを失念していた自分に憤りを感じていたルーカスは、判断に悩んでいた。相手は一人だがその腕には人質にされたマギーが抱えられ、もう片方の手には中国軍ピストルが握られている。その銃口は自分達に向かっているが、下手をすればマギーに危害が及ぶ可能性がある。

「……よくもヒートの計画をメチャクチャにしてくれましたね。この代償は高くつきますよ。」

こちらが動けないのを確信したのか、強気な感じで話していくボッシュ。

「今まで利益を減らしたくない一心で仏心を出してきましたがもう限界寸前です!! 次下手な真似したらマギーを殺します! 本気ですからね!」

そう言って武器を捨てるよう要求していく。仕方なく皆に従つよう促して、自身もハンドティングライフルを地面に投げ棄てた。

「よし、素直に壱つことを聞けば許してあげなこともあります。向こうに行きなさい!」

ポツポは住人達を武器から遠ざけようとする。一見強気に出でいるポツポだったが内心ではひどく焦っていた。今メガトン内部に残っているのは自分だけ。このままいけば敗北は必至だらう。外に出たキャス達が戻つてくれれば勝機はあると考え、相手に有無を言わさない為に必死な思いで キレる寸前を演じていた。武器から離れたのを確認して、だめ押しに起爆用ツールを見せつけようとして腰辺りをまさぐったとき異変に気づいた。

ない……ない……ツールがない！？

思わず冷や汗が流れる。今まで肌身離さず持ち歩いていた筈なのにそれがないのだ。

「お探しの物はこれかな？」

先程の演技も忘れ、慌てて全身を隈無く探ししていると声が聞こえたのでそちらを振り向くが、そこには誰もいない。いや、正確にはいるのだが見えなかつたのだ。进る電流とバチバチという音とともに誰もいなかつた場所にはコンバットアーマーとコンバットヘルメット（以下コンバット装備）を着た一人の青年 ユウが現れていった。その手には自分が探していたツールが握られている。

「な、何者だ貴様……!? いやそれより何故それを持っている！？」

「あー、マギーに頼まれた助つ人つてところかな？ これはさつきあんたから盗つたのさ。」

その言葉を聞いて理解する。あの時だ、手下に指示を出した後の突然の衝撃… あれはこいつがぶつかってきた衝撃だったのか。

「さて、残るはあんた一人、頼みのツールはこちらの手の内だけどどづくる？ まだやるかい？」

「当たり前のことを聞きますねえ。人質が見えないんですか、それにはまだ一人じゃありません。外に出た連中が戻つてくればまたこちらが優位です。」

気がつくと夜が明け始めていた。いつのまにか時刻は早朝に差し掛かっていたようだ。しかしそんなことはお構いなしにメガトンで現在進行形で起きている騒動は終わりの気配を見せない。

どちらも一步も引かない状況に長い膠着状態が続く… かと思われたが、メガトン入口の門が音を立てて開き始めたのを見て膠着は崩れた。

「ふうつ、漸く戻つてきましたか。」

部下が戻ってきたと思い安堵の表情をするポツポだが、彼の思いとは違い そこに立っていたのは「一体のロボットと101とロゴが書かれたジャンプスーツを着た一人の壮年の男性だった。

「残念だけどいつまで待つても君の仲間は戻ってはこないよ。」

「ど、どういうことだ！？」

「君の仲間達は不利を悟つてメガトンまで後退しだしたんだ。僕は後を追つたんだけど着いてみたら門の前にこのロボット達がいてね、どうやらメガトンに逃げ込めなかつたみたいだよ。彼らはスプリングベールの方に向に逃げていったよ。」

「あ、オフラインになつてたみたいだから私がスイッチ入れたの～。バカな、ロボットの機能は事前に停止しておいた筈だ。自分でやつたのだから間違いない。」

「あ、オフラインになつてたみたいだから私がスイッチ入れたの～。」

ジーメスの話とマギーの言葉を聞いてポッポは頭が真つ白になつた。つまり自分は仲間に見捨てられ孤立無援となつたのだ。

「…き、貴様らは何者なんだ！？ あんな大勢力が近くにいたなんて今まで聞いたことがないぞ！？」

もはやポツポには何が何だか分からなかつた。事前に行つていた周辺調査ではこんな勢力は確認されておらず、脅威になる存在などなかつた。それがどうだ。現実には自分以外に味方はなく、完全に“詰み”の状態。勝機などもはや見出だせず、せめて自分達の敵が何者なのかを知りたかつたがためにそんな言葉が口をついて出た。だが、それに対する壯年の男性 ジョームスの返答は予想だにしないものだつた。

「それはそうさ。何せアレらは昨日作つたんだからね。」

「…………元……！？」

ポツポには彼の言つことが信じられなかつた。言葉の通りならあれだけのロボットをたつたの一日で揃えたといふことだが、一体どんな魔法を使えばそんなことができるというのか。

「ヒントまじのメガトンの周りにあるものだよ。」

メガトンの周り？ 言われて直ぐに思いつくものはスクラップの山々だが…まさか！？

「気づいたようだね。僕達はスクラップの中から使えそうな物を修理して運用していくんだよ。」

「バカな！ 所詮はスクラップだ、あれだけの数を修復できるほど部品も時間もなかつた筈だ！？」

そう、ポツポの言つ通り 僅かな時間で組み上げられる物量ではなかつたし、それだけの良質な部品が大量にあつたとは考えにくい。

「確かに。まともに稼働させることができたのは数えるくらいしかいなかつた。実を言つとね、外にいた殆どは飾りみたいなものなんだよ。」

「な、何？ 飾りだと…？」

「そうだよ。夜襲だつたから分からなかつただろうけど後方に位置していたのはカメラアイの部分しかない図だつたのさ。」

その言葉に愕然とする。つまり自分達は夜の闇に明滅するカメラアイの光で相手が大軍だと誤認し、浮き足立つっていたわけだ。

こちらの善戦に進軍できなかつたのではなく初めから進む脚がなかつたといふことか。

まんまと騙されてしまったことに内心歎嘆して、ポップはこの後の選択肢を模索する、がいい案は浮かばずその場には沈黙が流れていった。

「仲間もこないうて分かったし、いい加減降参してくれない？」

「……フフッ、降参するのはあなたの方でしょう。マギーがどうなつてもいいんですか？」

ユウが降伏を勧めるがポップは一向に諦めない。

「言つておくけど、あんたがマギーに手を出す前にオレはあんたを倒すことができるわ。」

その台詞を聞いたポップは鼻で笑う。見たところ武器らしい物は所持していない田の前の男が、自分を倒す？ マギーに危害が及ぶ前に？ 一体どんな思考回路をしてたらそんな事が言えるのか…。

「ハツ、そんなハツタリが通用するとどうも？」

「ハツタリがどうか試してみるかい？」

再び一人の間に沈黙が流れる。今度はどちらがこの沈黙を破るのか周りの者は固唾を呑んで見守る中、意外にもそれを破つたのは両者どちらでもなかつた。

「いつ…ずあーーー？」

突然悲鳴をあげるポツポ。皆一様に何が起きたか分からなかつたが、彼の腕をみて理解した。人質にされたマギーが彼の腕に思いきり噛みついていたのだ。余りの痛さに腕の拘束が外れ、その隙をみて駆け出すマギー。

その背中に銃口がポイントされる。

銃を向けているポツポの目は怒りの余り充血し、血走つていた。今度は演技などではない、本気だ！！ その場にいた全員が確信した。

ルーカスやジェリコが棄てた武器の元へ駆け出す。  
ジェームスが背中に背負つたハンティングライフルに手を伸ばす。  
モリアーティが盾になろうとマギーの元へ駆け出す。ユウは…武器を所持していない、丸腰だ。

間に合わない。

誰もがそう感じた中、武器を持たない筈のユウだけは不敵な笑みを浮かべていた。

住人達の必死の行動も空しく無情にも銃声が鳴つた。その場にいた全員が目を見開いていた。

確かに自分達は間に合わなかつた。

一発の銃弾は放たれた。

しかし分からぬ。何故撃たれたのが“マギー”ではなく“ポツポ”なのか。銃を持っていた腕を撃たれたようで、傷を押さえながら呻いている彼を余所にその視線はユウの右手に注がれていた。

何も握られてはいなかつたその手にはいつの間にか一挺の10mピストルが握られていた。銃口から硝煙が出ているのを見るに撃つたのはユウだというのは分かるのだが、いつ・どこからという疑問は解消されない。

「…何故…いつの間に、いや、武器は持つていなかつた筈だ…」。

その疑問はポツポも同じだつたらしく、信じられないといった面持ちでユウを見ていた。

「それについては僕が説明しよう。」

ジームスが名乗り出る。じつやら彼だけは何が起きたのか理解しているようだ。

「君はこれ知っているかな？」

そつとポツポに自分の腕に付いている端末を見せた。

「それは、p.i.p.-b.o.y.-!-?」

「知っているようだね。なら『V·A·T·S』のことも知っているだろ？』

V·A·T·S……

The vault-Tec assisted targetting Systemの略称で、高性能端末であるp.i.p.-b.o.yを神経系に直接繋げることで、端末で得られた情報（例えば敵対した物の特徴や各部位の耐久力、攻撃した場合の命中率）をダイレクトに脳に伝達、脳内で瞬時に判断することにより思考から行動へのタイムラグを廃した画期的な戦闘システムである。

「一切のタイムラグなく脳内で瞬時に判断し行動に移せるのが『時間止めて戦闘状況を戦略的に判断する』と比喩される所以なんだ

けど、彼のは普通のとは違うんだ。」

そこで一旦説明を区切るジヒームス。何せり顎に手を当てて提案している様子だ。

「…………ここからは説明に困るんだナゾ、ビューティー原理が彼のV・A・T・Sは時間に介入しているんだ。」

「時間に…介入…？」

マギーが首を傾げる、がそれも無理はない。説明しているジヒームスでさえ何度見ても理解し難い代物なのだ。ここにいる殆どは話についてくることもできていないだろう。

「簡単に言つとね、自分の時間を早めて動くんだ。V・A・T・Sが発動している間は周りの動きがゆっくりに見える。」

「……何も持つてなかつたのにストルを持つてるのは？」

マギーが胡散臭いといった顔をしながら問う。信じられない話だが、それは置いといてもう一つの疑問を口にした。

「……これも説明にこまるんだけど…彼の p - e - p - b o y は物質をデータ化して保管したり取り出したりできるらしいんだ。」

益々胡散臭いといった顔で此方を見るマギー。気がつけば周りの人も皆同じような表情だ。

それを見たジェームスは思わず苦笑した。当の本人も同じように苦笑している。ポツポズを見ると先程の話が信じられないのだろう、理解できないといった表情で俯いていた。彼の銃はコウの一撃で離れた場所に落ちているので、もう危険性はないだろう。

朝陽がメガトンを照らす。それはまるで、解放されたメガトンを祝福しているかのようだった。

## 第10話 メガトン救出作戦その5（後書き）

無理くりな展開すぎたかな…。相変わらずの駄文ではありますが、暇潰しにでも見ていただければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5896t/>

気ままに！ ウェイストランド放浪記

2011年11月21日15時42分発行